

ロバート・バートン『メランコリーの解剖』における

idleness の諸相に関する一考察

榊原知樹

本発表では Robert Burton (1577–1640) の *The Anatomy of Melancholy* (1621) における idleness¹ の諸相に関して考察した。この作品はイギリスで 1580 年代から数十年間にわたり流行したメランコリーという心の病（鬱病）をテーマとする著作であり、第 1 部でメランコリーの原因や症状、第 2 部でその治療法、第 3 部で 2 種類の特定のメランコリーが論じられる。本発表で照準を定めた idleness は、この 3 部すべてで頻繁に取り上げられる重要概念である。作品を締めくくる“Be not solitary, be not idle.”という読者への助言も、idleness 概念に特別な位置が付与されていることを示唆している。『メランコリーの解剖』は言うまでもなくスターンやスウィフト、ジョンソンなどへの影響が知られる重要な作品であるが、これまで我が国では本格的な研究がほとんど行われてこなかった。英語圏に目を向けても、idleness の視点から本作品を考察した先行研究は見当たらず、バートンの idleness に関する思想はこれまで十分に解明されてきたとは言えない。本発表では、idleness に関するバートンの基本的な思想傾向を探り、その形成に作用した諸要因の解明を試みた。

1. バートンの idleness 観に見られる基本傾向

『メランコリーの解剖』のテキストから idleness への言及箇所を抽出して精査したところ、バートンが idleness をメランコリー（鬱病）の主たる原因とみなしていることが明らかになった。バートンの見解は当時の医学に浸透していた四体液説に基づいており、idleness がメランコリーを引き起こす機序に関するバートンの記述もこれに依拠している。バートンの idleness 観は動植物の比喩を用いた説明に顕著に表れている。耕されていない土地にシダや雑草が茂るように、また、馬小屋に留まって動かない馬や鷹籠に入れられたまま飛べない鷹が病気にかかりやすいように、idle な身体も病んだ状態に陥る危険にさらされているとの説明である。また、バートンは若者を「新築の家」に喩え、idle な人間をその手入れを怠っている「悪しき居住者」とみなしている。idleness は若者が親や教師から受けた教育の効果を消し去ってしまう悪徳であり、そのせいで「家」は土台から崩れてしまうと考えていた。さらに、バートンは idleness を身体的なものと精神的なものに区別し、後者をとりわけ深刻視した。精神的な idleness は「魂の錆び」であり、地獄のような状態だと表現している。水に動きがなければ腐敗し、虫が発生し、悪臭を放つ。それと同様、idle な人間の頭の中には、邪悪で汚れた想念が浮かぶ——idleness とは、魂がけがされた状態にほかならない、というのがバートンの考え方であった。加えて、バートンは人間の精神は、常に動き続けていることが望ましいと考えていた。空の絶え間ない変化、日の昇り沈み、月の満ち欠け、天体の絶えざる動き、風による空気の動き、潮の満ち干——こうした事象すべてが我々に、動き続けていることこそが人間にとって自然な状態であることを教えてくれているとバートンは述べている。さらには、第 3 部で論じられる恋愛メランコリーとの関連でも idleness はその最大の原因として言及されている。このように、idleness に対して極めて批判的なバートンの姿勢が浮かび上がった。

この特徴づけは他の著述家との比較によっても裏付けられる。『メランコリーの解剖』の構想や文体、テーマ選択などでバートンに大きな影響を与えたと考えられている 16 世紀フランスのモンテーニュ (1533–92) は、idleness を人間精神に好ましい状態とみなしていた。また、バートンが愛読していた古代ローマのセネカや、ピューリタン系の著述家にも idleness を肯定的に捉える傾向があり、バートンの idleness 観はこれらの著述家のそれとも好対照をなしている。以上のようなテキスト分析と他の著述家との比較から、idleness に対するバートンの姿勢の特徴は、それをメランコリーの主たる原因とのみみなすことにあり、人間精神に有益な性質を idleness にまったく認めていない点にあると言えよう。

2. バートンの idleness 観の形成に作用した要因

バートンの idleness に対する極めて批判的な姿勢の形成には、次のような宗教的、社会的、政治的要因が作用したと考えられる。宗教的要因としては、キリスト教の伝統において怠惰 (acedia) が 7 つの罪源のひとつに数えられてきたことが挙げられる。それに加え、バートンが生きた時代に特有の社会的・政治的要因として、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、イギリスにおいて idleness が国家レベルの深刻な問題となったという事情もあった。特に、1590 年代に頻発した徒弟の反乱を受けて当局が idleness を重罪と宣言したことなどの影響により、バートンが『メランコリーの解剖』を書いた時期には idleness を肯定的に捉える余地はほとんど残さ

れていなかったと推測される。社会的要因としてさらに、バートンの *idleness* に対する極めて批判的な姿勢は、バートンのイギリス観とも不可分に結びついている。バートンは貴族やジェントリといった上流階級をはじめイギリスの社会階級を横断して蔓延していた *idleness* を、イギリスがイタリアやフランス、ドイツと同様の繁栄を享受することを妨げている要因とみなしていた。バートンは自らを「魂の病」を治療する「精神の医師」と位置づけ、この問題の解決にむけた取り組みに加わることに使命感を覚え、これが『メランコリーの解剖』の執筆を続けた動機にも寄与したと考えられる。こうした宗教的、社会的、政治的要因の作用を受けて、バートンの *idleness* に対する批判的な姿勢が形成されたと言ってよいだろう。

3. ラテン語の *otium* 概念との関係

英文学研究において *idleness* の概念は、もっぱらラテン語の *otium* と同義とみなされてきた (Fludernik & Nandi)。考察対象を *idleness* から *otium* に拡大すると、バートンが *otium* の人間精神への有益性を認識していたことを示唆する記述も認められる。特に、バートンはデモクリトス・ジュニアという筆名で著作を刊行したが、この筆名を借りた古代ギリシアの哲学者デモクリトスの様子が描かれる箇所は、*otium* の表現が否定的な意味合いを帯びておらず、*idleness* 賛美派の著述家たちであれば *idle* と表現してもおかしくない記述が見受けられる。ただし、バートンは人間精神に有益な *otium* を *idleness* とではなく、*leisure* と表現した。バートンが *otium* の諸相を表現する際、メランコリーの原因となる性質を表す場合には *idleness* を、人間精神に有益な性質を表す場合には *leisure* を用いるという使い分けがなされたと見られる。さらには、*otium* がメランコリーに対して治癒的作用をもたらしうることをバートンが認識していたと解釈可能な記述も見られる。バートンは自らメランコリーを患っており、一歩誤れば症状の深刻な悪化を招きかねない状態にあった。そうしたバートンにとって、メランコリーについて書くこと一すなわち、『メランコリーの解剖』の執筆一は、メランコリーを引き起こす主たる原因である *idleness* を回避する手段として意図されていた点も見逃してはならない。

4. 結びにかえて

本発表では、ロバート・バートンの『メランコリーの解剖』における *idleness* の諸相、ならびにバートンの *idleness* 観の形成に作用した諸要因の解明を試みた。バートンは *idleness* をメランコリーの主たる原因と考える顕著な傾向を有し、この傾向は *idleness* を人間精神にとって有益な状態とみなす一群の著述家と好対照をなすことが確かめられた。*idleness* に対するバートンの極めて批判的な姿勢の形成に影響を与えた要因としては、キリスト教倫理思想の7つの罪源に含まれる怠惰などの宗教的要因や、1590年代の徒弟の反乱に対する英国当局の容赦ない措置などの社会的・政治的要因などを特定した。さらには、社会階級を横断した怠惰の蔓延がイギリスの繁栄を阻んでいると感じていたバートンのイギリス観との関わりも指摘し、バートンは自らを「魂の病」を治療する「精神の医師」とみなしていたことから、バートンの *idleness* 観が作品の執筆動機とも不可分に結びついていたと結論づけた。ただし、*idleness* との強い相関が認められてきたラテン語の *otium* 概念にまで考察を広げると、筆名を借りたデモクリトスについての記述や、デモクリトスの姿になぞらえた自己描写には、閑暇が精神に好影響をもたらすとの認識が窺われる。また、自らメランコリーを患っていたバートンにとって、『メランコリーの解剖』の執筆という、閑暇を必要とする行為は、メランコリーの治癒効果を期待してのものであった。以上のように、作品を締めくくる「*idle* であるなかれ」という言葉は、本発表で示したような宗教的、社会的、政治的要因が絡み合ったロバート・バートンの *idleness* 観に支えられていたのである。

註

¹ 意味範囲を限定することを避けるため、怠惰などの日本語訳を用いず、英語の *idleness* をそのまま使用した。

参考文献

- BABB, Lawrence. *The Elizabethan Malady: A Study of Melancholia in English Literature from 1580 to 1640*. East Lansing, MI: Michigan State College Press, 1951. Print.
- BURTON, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Ed. Thomas C. Faulkner, Nicolas K. Kiessling, and Rhonda L. Blair. 6 vols. Oxford: Clarendon Press, 1989–2000. Print.
- FLUDERNIK, Monika, and Miriam Nandi, eds. *Idleness, Indolence and Leisure in English Literature*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2014. Print.
- LUND, Mary Ann. *Melancholy, Medicine and Religion in Early Modern England: Reading The Anatomy of Melancholy*. Cambridge: Cambridge UP, 2010. Print.